

東京オリンピック・パラリンピックと社会言語科学

企画責任者 多々良直弘 (桜美林大学)

1. はじめに

近年オリンピック・パラリンピックやワールドカップなどに代表される様々な国際大会が世界各地で開催され、スポーツのグローバル化が進んでいる。このような世界各国の代表が参加する様々な国際大会が、通信技術の発展により様々なメディアを通じて我々のもとへ配信されている。スポーツとスポーツを報道するメディアは融合し、メディアを抜きにしてスポーツを語ることはできず、またメディアも社会におけるスポーツの重要性や人々の関心の高さを軽視することはできない。これまでのテレビ視聴率を振り返ってみると 1964 年の東京オリンピックにおける女子バレー日本対ソ連の試合の視聴率が歴代 2 位の 66.8% を記録し (ビデオリサーチ調べ)、その他にもオリンピックやワールドカップなど多くのスポーツイベントが歴代視聴率の上位に入っていることからスポーツとメディアは切っても切れない関係にあることがわかる。

2. スポーツイベントとメディアスポーツ研究

スポーツにはその社会の特徴が反映されており、社会を映し出す鏡であると言われることもあるが、そのスポーツを報道するメディアにも、社会の文化的価値観が凝縮されている。一般的にメディアはスポーツの試合を客観的に報道していると考えられがちであるが、実際には何らかの文化的基準に基づいて特定の視点から試合のある側面を取捨選択したり、もしくは情報を加えたりすることを通じて、スポーツイベントを編集して我々のもとに報道している。我々はスタジアムでスポーツの試合を直接体験することもできるが、大多数の人々は実況中継や試合後のニュース報道などのメディアというフィルターを通じて、メディアによって彩られ、切り取られた「メディアスポーツ」を観戦するのである。

オリンピック・パラリンピックなどのメガイベントを報道するメディアスポーツに関する研究は、橋本 (2002) などに代表されるようにこれまでは主に (スポーツ) 社会学の分野で行われてきたということができよう。社会言語学会におけるスポーツの研究は意外にも少なく、学会誌『社会言語科学』にこれまで掲載されたスポーツに関する研究論文は劉・細馬 (2016) と多々良 (2017) のみである。

3. 本シンポジウムの目的：社会言語科学におけるスポーツ報道研究の可能性

これまでも様々な研究分野においてメディアに関する研究が行われてきたが、情報技術が発展し様々なコンテンツがグローバル化の流れの中で世界各地に配信されるようになり、メディア研究の研究対象とその研究手法は増え続けている。例えばニュース報道をとっても、従来の新聞などの紙媒体やテレビ、ラジオといった媒体を通じてだけではなく、同じコンテンツがインターネットを通じても報道されるようになることでその研究の範囲は広がっている。更にはストリーミングによるスポーツ観戦や SNS などを通じた報道側と情報の受け手である視聴者との双方向性という特徴も研究範囲を広げている一因であるだろう。またやさしい日本語、文字情報や手話通訳など現在のメディアにおける情報提供をより良いものに改善していくための情報のバリアフリーを目指した研究も挙げられる。

スポーツとメディアに関する研究は多岐にわたるが、本シンポジウムでは、メディア報道に関する研究を通じてオリンピック・パラリンピックという国際的イベントに関して、社会言語学会の立場からどのような問題提起ができるのか、どのような研究成果を発信することができるか議論したい。今回は、様々な言語で報道されるスポーツの実況中継をデータとした多言語間の対照研究 (多々良)、選手たちが試合中にどのようにコミュニケーションを取りながら、戦略を決めているのかを分析した対照研究 (八木橋)、選手たちがインタビューなどで発言するコメントを翻訳する際にどのような理由で「役割語」が使用されているのかを分析した研究 (太田)、そしてスポーツの実況中継において、視覚障がい者に対してどのような情報を伝えるべきかを考察した自動解説放送に関する情報のバリアフリーを目的とした研究 (熊野) を通じて、社会言語科学においてオリンピック・パラリンピックなどのスポーツイベントにおいてどのような研究が可能であるのか、またウェルフェア・リングイスティックスの立場からどのような社会貢献ができるのか考察していきたい。

参考文献

- 橋本純一(編) (2002). 現代メディアスポーツ論 世界思想社
劉礫岩・細馬宏道(2016). カーレースにおける実況活動の相互行為分析—出来事マーカーとしての間投詞と実況発話の構成— 社会言語科学, 18(2), 37-52.